

お堂と庚申塔からみた旧一字村の民間信仰

民俗班 (徳島民俗学会)

橋 禎男*

要旨：旧一字村の民間信仰を探るため、集落を巡って聞き取りをしながら、現存する村内のお堂と庚申塔の調査をした。そしてこれまで阿波学会で実施した旧木屋平村や美馬町の調査結果と比較しながら、同村の民間信仰の解明を試みた。その結果、旧一字村にはお堂や庚申塔を中心とした民間信仰が今も残っており、村民の信仰心の強さを読み取ることができた。あわせて文化の伝達路であった峠と街道についても調査した。

キーワード：お堂, 庚申塔, 庚申信仰, 峠, 街道

1. はじめに

平成17年に貞光町、半田町と合併して「つるぎ町」となった旧一字村は、総面積94.41km²の80%を山地が占める剣山北麓に位置する山村である。村の中央部を北流する一字川に沿って国道438号が通っているが、明治42年に郡道ができるまでは周囲の山々の峠を徒歩で越えるのが、村外と交流する唯一の交通手段であった。

ところで、民間信仰は、庶民の日常生活や社会生活の中で現われてくる信仰現象で、社会の変化によって変貌してゆくが、人間の現世利益的欲求に基づいているため、地域を問わず、信仰対象物は異なっても祈願内容には普遍的な共通性を含んでいる。戦後は、個人的な信仰行為に変化してきた面が強いが、阿波市阿波町の庚申講のように、村落共同体としての信仰行事が残っている地域もある。

今回、庚申信仰を取り上げたのは、山村での庚申信仰の実態を把握することが目的である。調査は、平成22年7月30日から22年12月22日までの間の12日間である。

2. 旧一字村の庚申塔と庚申信仰

1) 庚申塔の種類と主な庚申塔

一字村の庚申塔については、『一字村史』の部落小史にある年表と地図の記載をもとに調査した。ここに記載のないものも見つけることができたが、檜地や寺地のように集落が消えた地区では、道の消失に加えて聞き取りできる人がいないため、村史に記載がありながらもどうしても探し出すことはできなかったものもある。

調査結果から一字村の庚申塔一覧を(表1)に、年代別造塔数を(表2)に示した。最も多いのは青面金剛で、文字塔と像塔を合わせると49基ある。これは庚申塔全体(63基)の78%にあたり、美馬町の82.5%よりやや低い木屋平村(64%)よりは高かった。

(表2)をみると、正徳期を境に本村でも青面金剛を主尊とする庚申塔が増えて、元禄～享保期にかけてピークを迎える。庚申塔は庚申信仰の行跡を示すものであるから、本村の庚申信仰の隆盛期を(表2)から読み取ることができる。なお、江戸後期から現

* 徳島市国府町日開42-5

旧一宇村のお堂 ■

番号	お堂の名称	所在地
1	観音堂	古見
2	薬師堂	赤松
3	地藏堂	大宗
4	大師堂	赤松
5	阿弥陀堂	寺地
6	阿弥陀堂	中横
7	観音堂	大横
8	阿弥陀堂	大横
9	木地屋堂	木地屋
10	阿弥陀堂	太刀之本
11	十家堂	十家
12	久日堂	久藪
13	阿弥陀堂	久藪
14	阿弥陀堂	伊良原
15	地藏堂	伊良原
16	地藏堂	九藤中
17	観音堂	大野
18	薬師堂	子安
19	赤羽根大師堂	蔭
20	薬師堂	剪宇
21	薬師堂	剪宇
22	観音堂	河内
23	観音堂	実平
24	地藏堂	奥大野
25	石休場堂	奥大野
26	阿弥陀堂	広沢
27	葛籠堂	葛籠
28	観音堂	桑平
29	薬師堂	平井
30	地藏堂	法正
31	古場大師堂	漆日浦
32	薬師堂	出羽
33	阿弥陀堂	明谷
34	観音堂	中野
35	大師堂	大屋内
36	大屋内堂	大屋内
37	岩戸堂	一宇

旧一宇村の峠 ■

峠名	標高(m)	
A	はぎの日浦越	790
B	宇峠	910
C	焼堂峠	900
D	京女郎越	970
E	木地屋越	1110
F	小島峠	1320
G	丸笹峠	1450
H	保賀山峠	1130
I	剪宇峠	860
J	インノタオ	605
K	キレンタオ	735
L	法正峠	830
M	カンボウ峠	840

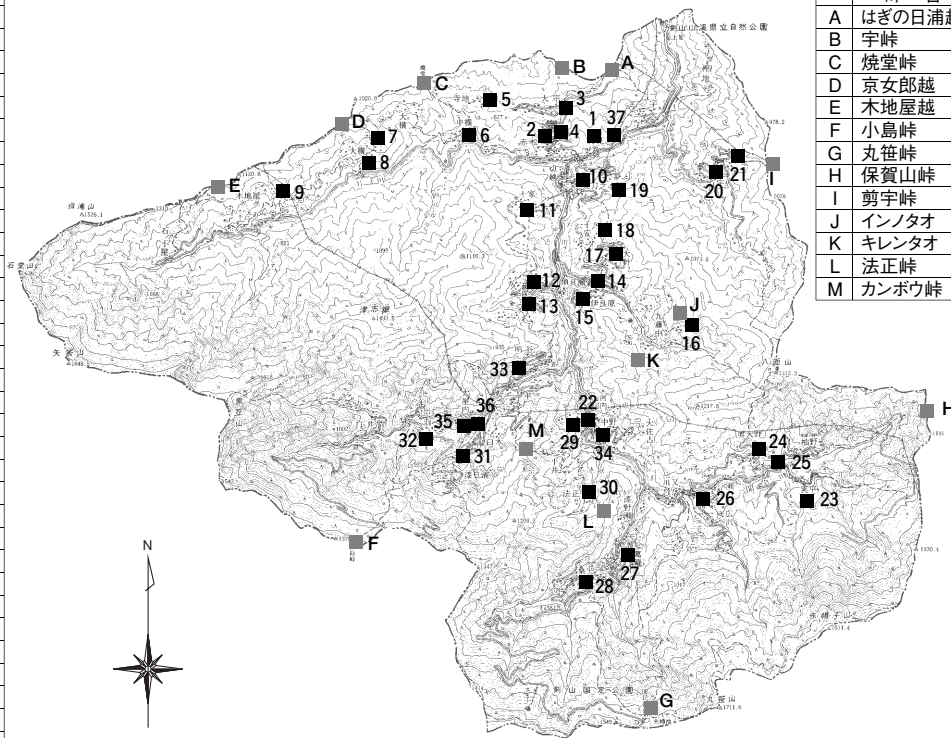


図1 旧一宇村と峠のお堂所在地



図2 宇峠



図3 小島峠

表1 旧一字村の庚申塔一覧

番号	所在地	種類				様式	造塔年代
		文字塔			刻像塔		
		庚申待	青面金剛	猿田彦	青面金剛		
01	旧一字村 一字				4-2-2	笠付	嘉永2 (1849)
02	" 一字	○				自然	なし
03	" 剪字	○				笠付	正徳5 (1715) 7月
04	" 古見				4-2-2	笠付	元禄7 (1694) 8月
05	" 赤松				6-2-2	笠付	宝暦10 (1760) 9月
06	" 赤松				4-2-0	笠付	昭和55 (1980) 10月
07	" 赤松				6-0-2	笠付	大正7 (1918) 1月
08	" 赤松				6-3-3	笠付	天明5 (1785) 3月
09	" 大宗	○				笠付	延宝1 (1673) 12月
10	" 大宗				4-2-2	笠付	元禄4 (1671) 8月
11	" 寺地				6-3-2	笠付	寛延4 (1751) 6月
12	" 中横				4-3-2	笠付	享保14 (1792) 1月
13	" 大横	○				笠付	元禄7 (1694) 12月
14	" 大横				6-2-2	笠付	享保9 (1724)
15	" 木地屋				6-3-2	笠付	寛延2 (1749) 11月
16	" 子安				4-2-0	笠付	宝永6 (1709) 4月
17	" 大野				4-3-2	笠付	享保6 (1721) 4月
18	" 九藤中	○				笠付	元禄2 (1689) 1月
19	" 伊良原	○				笠付	元禄3 (1690) 8月
20	" 河内		○			自然	享保2 (1717) 11月
21	" 河内				6-3-2	笠付	天明5 (1785) 11月
22	" 河内	○				笠付	延宝7 (1679) 11月
23	" 河内		○			自然	正徳4 (1714) 11月
24	" 中野				6-3-2	木像	不明
25	" 中野	○				笠付	天和1 (1681) 11月
26	" 中野				4-2-2	剣形	享保17 (1732) 2月
27	" 中野				4-3-2	笠付	宝永4 (1707) 3月
28	" 川又	○				笠付	延宝8 (1680) 11月
29	" 川又				4-2-2	剣形	享保15 (1730) 10月
30	" 川又		○			剣形	延宝7 (1679) 7月
31	" 川又	○				剣形	延宝7 (1679) 11月
32	" 広沢		○			破損	元文5 (1735) 2月
33	" 広沢		○			笠付	明治37 (1904) 3月
34	" 川又椿日浦				6-3-0	笠付	安永5 (1776) 10月
35	" 広沢土須				4-2-2	剣形	宝永5 (1708) 3月
36	" 広沢土須				4-2-2	剣形	享保4 (1719) 10月
37	" 実平				4-2-2	剣形	宝永4 (1707) 5月
38	" 奥大野桃屋敷下				6-3-2	笠付	安永3 (1774) 11月
39	" 仙野		○			剣形	寛保2 (1742) 10月
40	" 仙野		○			剣形	寛保2 (1742) 10月
41	" 奥大野石休場				4-3-2	剣形	明治30 (1907) 3月
42	" 奥大野石休場				4-3-2	四角	享保17 (1432) 10月
43	" 奥大野			○		角錐	明治29 (1896) 4月
44	" 仙野瀬開				6-3-0	笠付	明和5 (1468) 6月
45	" 奥大野		○			自然	享保3 (1718) 10月
46	" 仙野王太子神社			○		自然	明治12 (1579) 11月
47	" 十家				4-3-2	笠付	享保3 (1718) 5月
48	" 久藪				4-2-2	笠付	宝永4 (1707) 11月
49	" 久藪蔭地				4-2-2	笠付	宝永4 (1707) 3月
50	" 明谷				4-2-2	笠付	享保9 (1724) 11月
51	" 明谷		○			笠付	貞享1 (1684) 6月
52	" 明谷				4-3-2	笠付	享保11 (1726) 3月
53	" 明谷				4-2-2	笠付	享保12 (1727) 3月
54	" 出羽				4-2-2	笠付	享保3 (1718) 5月
55	" 漆日浦				4-2-2	笠付	享保3 (1718) 9月
56	" 法正				4-2-2	笠付	宝暦9 (1759) 10月
57	" 葛籠			○		剣形	なし
58	" 葛籠		○			自然	享保7 (1722) 6月
59	" 葛籠				6-3-2	剣形	宝暦7 (1757) 3月
60	" 葛籠	○				角錐	延宝3 (1675) 10月
61	" 桑平				4-2-2	笠付	元禄7 (1694) 10月
62	" 桑平				4-2-2	笠付	大正12 (1923) 5月
63	" 桑平				4-3-0	笠付	大正12 (1923) 5月
	合計	11	10	3	39		

種類の刻像塔の数字は、左の数字は青面金剛像の手の数を、中央の数字は猿の数を、右の数字は鶏の数を表している。

表2 旧一宇村の庚申塔年代別造塔数

年紀	西暦	文字塔			刻像塔		合計
		奉供養 庚申待	青面金 剛	猿田彦	青面金 剛	猿田彦	
明暦	1655～						
万治	1658～						
寛文	1661～						
延宝	1673～	5	1				6
天和	1681～	1					1
貞享	1684～		1				1
元禄	1688～	3			3		6
宝永	1704～				6		6
正徳	1711～	1	1				2
享保	1716～		3		13		16
元文	1736～		1				1
寛保	1741～		2				2
延享	1744～						
寛延	1748～				2		2
宝暦	1751～				3		3
明和	1764～				1		1
安永	1772～				2		2
天明	1781～				2		2
寛政	1789～						
享和	1801～						
文化	1804～						
文政	1818～						
天保	1830～						
弘化	1844～						
嘉永	1848～				1		1
安政	1854～						
文久	1860～						
文久	1861～						
元治	1864～						
慶応	1865～						
明治	1568～		1	2	1		4
大正	1612～				3		3
昭和	1926～				1		1
小計		10	10	2	38	0	60
年紀不明・なし		1		1	1	0	3
合計		11	10	3	39	0	63

れる猿田彦は、文字塔が3基あるだけで前記の2町村と同様少なかった。

村内の主な庚申塔を3例上げる。

(1) 村内最古の庚申塔 (図4)

村内最古の庚申塔は、村史の年表から見ると、(表1)の一字の自然石庚申塔(02)になるが、この石材は粗面の山石そのものであるため、年表通り「寛文二年」(1662)を読み取ることは難しい。年紀らしい字の下には「申二年」と読める銘があるので、寛文2年は寅年であることから、年紀を「寛文二年」と決めるには無理がある。

今回の調査結果から見ると、大宗の地藏堂横にある庚申塔が延宝元年(1673)の造立で村内最古である。県内最古の庚申塔は、明暦3年(1657)の阿波市市場町大門にある文字塔で、隣村の木屋平では寛文3年(1663)の青面金剛像が最も古い。いずれも本村の庚申塔造立より10年以上古い。

地藏堂に近い字峠には、元禄4年(1691)の青面金剛像があることから、このルートが村内への庚申塔流入路の一つである可能性が考えられる。なお、この庚申塔の銘文は「奉供養庚申待一座為現世安穩往所善所也」で、「一座」とは60日に一度巡ってくる庚申の日に、お堂などで庚申行事をしたことを表し、1年で6回、3年で18回終わると一座として庚申塔を立てた。

(2) インノタオの庚申塔 (図5)

インノタオは、奥九藤中と九藤中を結ぶ旧道にあり、お堂前に石仏が並ぶ雰囲気の良い峠で、キレンタオや大野の集落がすぐ近くに見える。ここに「奉



図4 村内最古の庚申塔 (左)

「供養庚申待座二世安楽」と刻まれた元禄2年(1689)の庚申塔がある。塔の下部にある造立者の名前をみると、「太左衛門 源左衛門 作衛門」など男性の名前の間に、「女房」という字が6カ所刻まれている。これまで多くの庚申塔を見てきたが、造立者の名前はすべて男性に限られていた。ここに刻まれた「女房」という字は、何を意味するのだろうか。

おそらく、この村における女性の役割の大きさを男性が認識していて、庚申塔を立てる際に「女房」の2字を入れることになったのではなかろうか。この庚申塔は、江戸時代における山村の女性の地位を考える上で一つの資料となる可能性がある。

(3) 剣山遥拝所横の庚申塔(図6)

川又にある剣山遥拝所横に2基の庚申塔がある。左側の享保15年(1730)の青面金剛像はユーモアあふれた像で、青面金剛の下に2匹の猿が描かれているが、左の猿は右の猿の片足を持ってでんぐり返しをしており、戸惑った右の猿と澄まし顔の左の猿の対比が妙を得ている。微笑を浮かべて、上からふざけた猿を見下ろしている青面金剛像の右足を突き出した姿もいい。

一般に青面金剛像はいかめしい表情の主尊と、そ

の下で澄ました横並びの3匹の猿が多いが、この像の制作者はそれを打ち破って存分に遊び心を表している。信仰面だけでなく、石仏としての庚申塔に人気があるゆえんであろう。

2) 七庚申めぐり

河内で聞き取り調査中、今も「七庚申めぐり」をしている女性に出会った。これは近在の庚申塔を7カ所巡って、家内安全や健康祈願をするもので、月1回二人で連れ立って出かけているという。その場合、谷を渡って行くことはよくないと言われているので、河内の地蔵の森を出発点として、川又で3カ所、中野で2カ所、最後は定光寺の本堂に祀られている木像の青面金剛に参拝して終わるといふ。定光寺の養學快見住職によると、昭和60年代から平成5、6年にかけては、庚申めぐりをしていた人は25人位いたという。

「七庚申めぐり」をしていたという話は、十家の女性からも聞いた。昭和40年代、友達4、5人で十家の阿弥陀堂(1基)をスタートし、久藪で2カ所、明谷で4カ所を巡るもので庚申塔数は7基である。「お地蔵さん、お大師さんより、まず庚申さんがありがたい」とその女性は話してくれた。3年前の木



図5 インノタオの庚申塔



図6 剣山遥拝所横の庚申塔

屋平村の調査では、麻衣あさぎぬで「七庚申めぐり」の話を聞いたが、一宇村ではその習俗がまだ残っていることを知り感銘を受けた。しかし、その人数は減少し、押し寄せる高齢化の波の中で、いつまで続けられるか心配である。

なお、地藏尊や大師より庚申塔を上位に置いた、一宇村の民間信仰の形成過程については、興味あるテーマとして今後の課題としたい。

3. 旧一宇村のお堂と信仰

1) 一宇村のお堂

一宇村のお堂については、『阿波のお堂』にある一覧表をもとに調査し、村史の部落小史の記述を参考にして所在地を(図1)に、お堂と仏像一覧を(表3)にまとめた。お堂は村内のほとんどの集落にあり、複数のお堂を持つものも7集落あった。お堂内に祀られている仏像は、弘法大師、地藏菩薩、薬師如来、観世音菩薩、不動明王と幅広く、美馬町のように弘法大師に偏った傾向は見られなかった。そして、お堂の三分の二には境内に庚申塔が祀られていた。このことは、お堂が集落の信仰の中心地であることを表している。本尊を決める際も寺の指導はあったと考えられるが、特定の宗派の影響は特に見られず、庶民の多様な願いをかなえてくれるように、堂内に諸仏を配したものと考えられる。

お堂以外の庚申塔の所在地は、峠や集落を結ぶ道の辻である。これは美馬町や旧木屋平村も同じで、このことは庚申塔が道の神としての性格を持っていることを示している。なお、旧木屋平村の川井以南のお堂には、木像の青面金剛像が多数見られたが、本村では前述の定光寺の本堂に一体を見るだけであった。隣り合う村でありながら、信仰対象の像容に大きな差がみられるのは興味あることである。

2) お堂と民間信仰

調査終了後、印象に残ったお堂を3例あげる。

(1) 十家堂(図7)

十家に行くには、国道から山道を1時間登らなければならぬ。よく踏み固められた道は快適で、民家が見え出すと展望が開けて目の前に静かな山村風景が現われる。車がなかった時代の山村は、こんなどかな風景だったのかと想像は広がり、季節を変



図7 十家堂

えてまた訪れてみたくなる。ほとんどすべての集落に車道が通じてしまった現在、このような体験ができる山里は、貴重な文化的景観をもった集落といえるだろう。

集落の中心にあるお堂には、この地区の年間行事表が貼ってあった。15の行事の内お堂に関係ある信仰行事は7つで、お堂がこの地区の暮らしの中で重要な位置を占めていることを物語っている。しかし、この集落も過疎化の波で、35、6戸あった民家も現在人が住んでいるのは2戸だけで3人である。

(2) 大横の観音堂(図8)

大横の観音堂は京女郎越に上る途中にあるが、登るには片川沿いの旧片川小学校跡から40分を要する。このお堂は最近大横の出身者と住民によって改築されたが、藤原時代の聖観音像や応永17年(1410)銘のある鰐口が残っている。近くには、山の神信仰をうかがわせる京女郎祠があり、今も近くの三上氏によって丁寧ていねいに祀られている。しかし、過疎化が急速に進む中で、地元民による文化財保護は限界があり、仏像などの保管状況も十分とはいえないので、今後行政側の対応が必要であろう。

(3) 法正の地藏堂

法正の地藏堂は、河内から登ると2時間を要する。近くに天ノ岩戸神社があり、県下で数少ない猿田彦命あめのうずめのみことや天鈿女命あめのつひめのみことの大きな丸彫りの石像があるので参拝者があったが、最近林道が開通したため、従来の街道は荒廃してゆく恐れがある。新設された林道は、神社への石段を横から突き崩して付けられており、文化財保護上大いに問題がある。

表3 旧一字村のお堂と仏像一覧

W：木像 S：石像 ○：本尊

番号	お堂の名称	所在地	お堂内の仏像							お堂外の石仏				
			阿弥陀如来	弘法大師	地藏菩薩	薬師如来	観世音菩薩	不動明王	毘沙門天	庚申塔	弘法大師	地藏菩薩	庚申塔	
1	観音堂	古見					⓪	W	W		S	S	S	
2	薬師堂	赤松		W		⓪							S	
3	地藏堂	大宗			⓪			W	W				S	
4	大師堂	赤松		⓪										
5	阿弥陀堂	寺地	⓪											
6	阿弥陀堂	中横	⓪					W	W		S		S	
7	観音堂	大横					⓪							
8	阿弥陀堂	大横	⓪					W	W		S	S	S	
9	木地屋堂	木地屋		⓪									S	
10	阿弥陀堂	太刀之本	⓪	W										
11	十家堂	十家	⓪		W			W	W		S	S	S	
12	久日堂	久藪			⓪						S		S	
13	阿弥陀堂	久蔭	⓪						W		S			
14	阿弥陀堂	伊良原	⓪										S	
15	地藏堂	伊良原			⓪									
16	地藏堂	九藤中			⓪			W			S		S	
17	観音堂	大野					⓪		W		S	S	S	
18	薬師堂	子安				⓪					S			
19	赤羽根大師堂	蔭		⓪										
20	薬師堂	剪字				⓪								
21	薬師堂	剪字				⓪								
22	観音堂	河内		W			⓪	W	W			S		
23	観音堂	実平			W		⓪	W					S	
24	地藏堂	奥大野			⓪								S	
25	石休場堂	奥大野			⓪								S2	
26	阿弥陀堂	広沢	⓪										S2	
27	葛籠堂	葛籠				⓪					S		S2	
28	観音堂	桑平					⓪	W					S	
29	薬師堂	平井				⓪					S			
30	地藏堂	法正			⓪								S	
31	古場大師堂	漆日浦		⓪									S	
32	薬師堂	出羽				⓪							S	
33	阿弥陀堂	明谷				⓪							S	
34	観音堂	中野					⓪					S	S	
35	大師堂	大屋内		⓪										
36	大屋内堂	大屋内				⓪		W						
37	岩戸堂	一字		⓪									S	
合計			8	9	9	9	7	10	8	0	11	6	26	
阿弥陀堂		8	木像	8	3	5	9	7	10	8	0	0	0	
大師堂		4		石像	0	6	4	0	0	0	0	12	6	26
地藏堂		5	木屋平村	8	18	22	4	10	12	7	0	4	4	
薬師堂		6		美馬町	13	35	2	5	14	4	0	2	0	5
観音堂		7												
その他		7												
庚申塔総数		旧一字村：63		旧木屋平村：78			旧美馬町：40							



図8 大横の観音堂

法正の集落は無人となって久しく、お堂は倒壊寸前である。中には彩色の跡が残る木像の地蔵尊が独り砦を守るように立っているの、今の内ならば移転して保存は可能である。

4. 旧一宇村の峠と街道

一宇村の峠とお堂の所在地を（図1）に示した。峠は村境に9カ所、村内に4カ所あり、主な峠には必ず石造物があることから、村民と峠道との強いつながりを知ることができる。

主な峠と街道は、次の通りである。

1) 一宇村の主な峠

(1) 宇峠 910m（図2）

一宇村の北の玄関口にあたり、一宇街道として貞光、半田方面との交流によく利用された。また、剣山道としても知られ、貞光南町には「つるぎ山道はより九里八丁」の道標が残っている。近年はハイキング道として利用者が多く、地蔵尊を祀るお堂と庚申塔のある宇峠は、県下の峠の中でも昔の雰囲気をよく残している峠の一つである。

(2) 剪宇峠 860m

東の玄関口に当たる剪宇峠は、杉の大木の下に2体の大師像を祀る祠がある。剪宇と穴吹町北又とを結んでいたこの峠は、中世には山岳武士も越えたといわれているが、峠道は廃道同然で杉林におおわれて暗い。林道工事は、峠手前約200mで止まったため、文化財として価値の高い剪宇峠は破壊から免れることができた。

(3) 小島峠 1,320m（図3）

祖谷に通じる道として知られた小島峠は、村内で

丸笹峠に次いで高い位置にある峠で、江戸時代の文献にもよく登場する。峠には杉の古木の下に地蔵尊を祀った祠があるが、この石仏は右手に金剛杵こんごうしよを持っているため、大師像と間違われることがある。毎年6月末に地蔵祭りが行われ、東祖谷と一宇の住民の交流が続いているのは特筆すべきことである。

(4) 京女郎越 970m

大横から半田へ越える京女郎越は、伝説とお堂や石仏など文化財に富んだ峠道で、今もここを訪れる人は多い。特に観音堂や峠から望む黒笠山や矢筈山の山岳景観は雄大で、雪の季節には特に素晴らしい。最近林道開設が持ち上がったが、コースは直接峠を通さず北寄りに変更されたので、峠の標識とヒゲネワチガイソウの生える峠一帯は保存された。峠は杉が伐採されて展望がよくなったので、訪れる人はさらに増えるだろう。

2) 一宇村の旧街道

一宇村の地形の特徴の一つは、集落のほとんどが標高400m以上の高地にあり、集落間を結ぶ連絡路が旧街道として残っていることである。これらは現在まったく使われていないため損壊箇所も見られるが、一宇川沿いの国道と違って展望に恵まれ、お堂や石造物の文化財が数多く残っているの、復活すれば他の山村にはない歴史や民俗探訪の山岳歩道となると期待される。

一例として、つるぎの宿・岩戸を起点にして、まず十家に登り久敷を経て明谷に出て平井、法正から法正峠を越えて漆野瀬に下る。そして葛籠谷を渡り川又に出る。川又から中野を経て河内に下り、さらにキレントオを越えて九藤中川を渡りインノオに登る。さらに大野、子安を経てミニ八十八カ所を通り太刀之本に下る。この間にお堂は12カ所、庚申塔は24基を数える。なお、本コースは健脚者向きで2日間を要するため、初心者はコースを分けて歩くのがよい。もし、一度に巡る場合は、途中の川又あたりで1泊する必要がある。

6. おわりに

無住となった集落は別にして今回巡った地域では、石仏の前に花や水が常に供えられていて非常に感銘を受けた。ここに村の将来につながる大切な

が表れているように思った。

近年、一字村は巨木で全国に知られるようになった。これらの巨木を見ると神社やお堂の境内にあるものが多く、その他の場所であっても根元に祠や石仏が祀られているものが大部分である。すなわち、巨木として今日残っているものは、住民の強い信仰心によって大切に守られてきたことがわかる。

民間信仰の原点は、巨岩信仰や巨木信仰に見られるように、大自然に対する畏敬の念に始まるとされている。村内に残る数多くの巨木から、山深い自然の中で生きてきた一字村民の根強い信仰心をうかがうことができた。なお、民間信仰の現状をより広く知るためには、お堂や神社で行われている祭祀についても調査すべきであったが、今回は時間切れとなってしまった。今後の課題としておきたい。

歩く距離が長かった今回の調査を無事終えること

ができたのは、何よりも地元の皆様のご協力のお蔭であった。お世話になった旧一字村の皆様に、心からお礼を申し上げ結びとしたい。

文献

- 1) 一字村史：一字村（1972）p.31～489.
- 2) 阿波のお堂：阿波のお堂の習俗研究会（1988）p.204～206.
- 3) 日開谷川流域の民俗：徳島県郷土文化会館（2009）p.105～110.
- 4) 阿波学会紀要 54号：阿波学会（2008）p.187～194.
- 5) 阿波学会紀要 55号：阿波学会（2009）p.165～172.
- 6) 阿波学会紀要 56号：阿波学会（2010）p.193～200.
- 7) 石神信仰：大護八郎（1977）p.283～384 p.624～700.
- 8) 日本民俗大辞典：吉川弘文館（1999）p.630～631.
- 9) 暮の糧：上柿源内（2007）p.207～219.
- 10) 民間信仰：桜井徳太郎（1966）p.38～41.
- 11) 阿波の峠今昔：橘 禎男（2010）p.12～13, 39, 75, 84, 107, 141.

Folk belief of Ichiu area in Tsurugi Cho from the viewpoint of the small shrines and the koshin belief monuments.

TACHIBANA Sadao,

Proceedings of Awagakkai, No. 57 (2011), pp. 147 - 155.

